

ロバート・ウォレスとモーペルテュイ — 幸・不幸の比較について —

Robert Wallace and Maupertuis on the Comparison of Happiness and Misery

中 野 力

Maupertuis thought that human life as a whole was more miserable than happy. His principles were based on Stoicism. Since suicide was an idea of Stoicism, it could be said that the criticism against him of condoning suicide arose as a matter of course. If it were true that he rejected suicide, the fundamental solution to escape misery would be lost.

Wallace criticized Utopia and admitted the vices in the world. However, he did not necessarily think that the whole world was filled with vices. Even if vices exist, he thought that this world was not gloomy and that the natural, the animal and the human worlds were able to be harmonious. That was why he thought happiness was superior to misery. Furthermore, he thought mankind has abused liberty and, that by this abuse, vices enter the world. Since he thought it important that vices in this world were dependent on men instead of God, it seems at first sight that to establish the superiority of happiness is not so important, but it becomes a great advantage in protecting Providence.

After these arguments, he described a future state after death in which virtues were to be rewarded and vices were to be punished. Thus it is understood that his arguments in *Prospects* were focused on vices. It could be said that this book elucidates one aspect of his Theodicy.

Tsutomu Nakano

JEL : B31

キーワード : 幸福、不幸、快楽、苦痛、善、悪徳

Key words : happiness, misery, pleasure, pain, good, vice

1. 始めに

モーペルテュイ (Pierre-Louis Moreau de Maupertuis, 1698-1759) はニュートン理論をフランスに紹介した人物として名高い¹⁾。モーペルテュイはフランスのサン・マロで生を受けた後、1723年にパリの科学アカデミーの会員となり、ヴォルテールやシャトレ夫人と知り合った。モーペルテュイは生物学、数学、力学、天文学などに関する論文を発表し、28年にはロンドンに渡った。その時すでにニュートンは亡くなっていたが、ニュートン理論を吸収し、帰国後、デカルトの学説を批判した。また『自然のヴィーナス』という著作で、生物の個体発生について述べたほかにも、「最小作用の原理」を提唱するなど、自然科学におけるモーペルテュイの功績は小さくない。

モーペルテュイの著作を見ても、全体的に生物学や天文学などが多く、幸・不幸の比較を論じ、人間は概して不幸であると主張した『道徳哲学の試論』のような著作は珍しい。このような著作は他に見ても、『言語の起源と語の意味指示に関する哲学的省察』くらいのものである²⁾。幼少期にロックの『人間知性論』を教えられているとはいえ、モーペルテュイの『道徳哲学の試論』は著作集を見ても例外に位置するものであり、彼の功績もやはり、自然科学に帰せられるだろう。

それでも『道徳哲学の試論』は決して注目されなかったわけではない。モーペルテュイがこの著作で論じた快・不快の計算は、ベンサムに影響を与えたとも考えられている³⁾。

モーペルテュイは全集版の中で、この本が出版されたときに、さまざまな批判を受けたと序文で述べている。その批判とは、モーペルテュイの文章に自殺を擁護していると思われる箇所があること、またモーペルテュイが宗教とは論証不可能なものであると述べていることについてなどである。

これに対してモーペルテュイは自殺を容認することはしないと一蹴し、宗

1) モーペルテュイの伝記については主として Grimsley (1971) に収録されている略年譜 175-176 頁と Valentin (1998) を参考にしている。

2) 草稿ではあるが、経済について述べられたものもある。Beeson and Coleman (1999) を参照。

3) Baumgardt (1952), pp.221-224 を参照。ベンサムが未発表の草稿でモーペルテュイについて論じていることを紹介している。

教については、もし宗教が幾何学みたいに論証可能であるとするなら、全員がその考えに説得されているはずだとして、宗教は論証不可能であるという立場を取っている。しかし、モーペルテュイは決して宗教を批判したのではなく、序文で次のように述べている。

「私の著作はとても変わった境遇にあった。というのも私の著作を冒瀆な本と認めさせたい人たちもいれば、この著作を敬神なもののみなした人たちもいたからである。本来はそのどちらでもない。神学者たちはあまりにも横柄に推論の能力を禁じようとする一方で、今日の哲学者たちは、神について語るやいなや、それを説教だとみなしている。このような両者の考え方の対比が、私に中道を守らせようと強く思わせるのである」(Maupertuis 1749, p.182)。

モーペルテュイはこのように、宗教を全面的に肯定しようとも、批判しようとも思わないと考えているが、それでもモーペルテュイの文章にはむしろ宗教を批判しているような箇所が多く存在する。

このようなモーペルテュイの立場に対して、ウォーレスはモーペルテュイの不幸の優越論を批判したのであり、人間は概して幸福であることを『人類、自然、および神慮についてのさまざまな展望』(Wallace 1761, 以下『展望』と略す)で示そうと努める⁴⁾。

ウォーレスの『展望』は神学書として著されたものであるが、全12章のうち、最初の4章がユートピア論となっている。ウォーレスは牧師であるがゆえに当然のごとくキリスト教に関心を抱いていたが、その一方で政治・経済論にも強い関心を持っていた。その中でも特に統治形態について述べられることが多い。ウォーレスの論調はジャコバイトを批判し、名譽革命体制を擁護することにあるので、当時のブリテンの政治体制がどれほど優れているかを論述することが中心である。

4) 『展望』が出版された年(1761年)にはモーペルテュイはすでに他界している(1759年)。

しかし、ウォーレスは決してブリテンの政治体制に全面的に満足しているわけではないとして、『展望』でユートピアを論じることになるのだが、ユートピアでは人口が不可避的に増加する一方で、この大地は無限のものではなく限りがあるものなので、ユートピアは最終的に過剰人口によって崩壊へいたる。かくしてウォーレスは自ら考案した完全な統治形態を放棄することになる。このような一見すると暗い論理展開のように見える『展望』ではあるが、ウォーレスはユートピア論の後、第6章と7章で、人生における幸・不幸の比較をし、幸福のほうが勝っていると説く。

ウォーレスはユートピアを批判するが、ユートピアを成立させないために、悪徳を容認する⁵⁾。しかしながら悪徳の容認ということはそのままこの世界の不幸を認めることには繋がらない。ウォーレスは『展望』の第5章で「自然の美、知恵、そして壮大さについての一見解」というタイトルを掲げ、ユートピア論では大地に限界があるゆえに、ユートピアが崩壊せざるを得ないと考えたその大地を調和の取れたものとする。そして第5章の自然世界から第6章と7章で、動物、人間世界へと議論を移す。動物、人間には確かに不幸が存在するけれども、概して幸福であるとウォーレスは説く。この議論はウォーレスが述べるように「神の擁護」のためのものである。たとえこの世界に悪が存在したとしても、決して神はこの世界が不幸になるように創ってはいないと考えられる。そして第8章の自由・必然論で、悪徳の原因は自由を乱用した人間にあるとウォーレスは考えることになるのである⁶⁾。このように、ウォーレスの幸・不幸の議論はそれ独自に切り離された論旨ではなく、前後の章と関連付けて考察される必要がある。

2. モーペルテュイの幸・不幸について

まずモーペルテュイは快樂と苦痛の定義を行う。

5) 中野(2008)を参照。

6) 中野(2003)を参照。

「私は、魂が感じないことよりも、感じることを好むすべての知覚を[・]快楽 (*plaisir*) と呼ぶ。また私は、魂が感じることも、感じないことを好むすべての知覚を[・]苦痛 (*peine*) と呼ぶ。魂がとどまっておきたいと思ひ、それを失いたいとは願わない知覚、つまりその中にいる間は、他の知覚を感じたいとも思わず、寝たいとも思わないとき、そのすべての知覚は[・]快楽 (*un plaisir*) である。その知覚が続いている間を[・]幸福なとき (*moment heureux*) と私は呼ぶ。

魂が避けたいと思ひ、失いたいと願う、つまり他の知覚を感じたいと、寝たいと思うとき、そのすべての知覚は[・]苦痛 (*une peine*) である。この知覚が続いている間を[・]不幸なとき (*moment malheureux*) と私は呼ぶ」 (Maupertuis 1749, pp.193-94, 傍点は原文のイタリック)。

これに加えて、モーペルテュイは持続期間 (*la durée*) と強度 (*l'intensité*) を考慮に入れる。強度が二倍で、持続期間が一倍のときは、強度が一倍で、持続期間が二倍のときに等しいと考えられる。しかしながら、このようなものは全ての場合に当てはまるのではないともモーペルテュイは考える。快楽の種類によって強度は変わるものであり、また、短期間で強い快楽を求めたり、長期間での弱い快楽を求めたりするなど、人によって性向は変わると考えられる。それゆえに、大別されると、幸・不幸は次のように定義される。

「[・]満足 (*le bien*) は幸福なときの合計である。

[・]不快 (*le mal*) は同様に不幸なときの合計である。……。

[・]幸福 (*le bonheur*) はすべての不快を取り除いた後に残る満足の合計である。

[・]不幸 (*le malheur*) はすべての満足を取り除いた後に残る不快の合計である」 (Maupertuis 1749, p.197, 傍点は原文のイタリック)。

幸福は満足と不快の両方を考慮に入れなければならない。それゆえ、不快を計算に入れていない段階で最も満足を得ている人が、必ずしも幸福の合計

が最大とはならないのである。不快は満足を減少させることになるゆえに、最も幸福な人とは、不快の合計を取り除いた後に、満足の合計が最も残っている人のことをいう。人間とは満足を増加させ、不快を減少させるように行動するべきであると考えられる。

確かにこれらの比較について困難も存在する。現在での満足と不快、遠い将来での満足と不快の比較という時間が異なったところでの比較や、不快を避けるために止めなければならない満足などである。しかしそれでも、概観してみれば、幸・不幸とは満足と不快の差であると考えられる。

モーペルテュイはこのように第1章で定義を行った後、第2章で「通常の人生では不快の合計が満足の合計を上回る」ことを例証する。

モーペルテュイによると人間とは知覚の絶え間ない変化を望むものであり、そのことが実現するまでは、その時間を消滅させたいと願うと考えられる。つまり、人は満足を手にするためには何日も、時には何年にもわたるときがあるが、それらの時間は結局無駄でしかないのである。老人は自分の過去を振り返ってみるとき、自分の体験したことがいかに少ないものでしかないに驚く。彼の長い人生は短い人生に簡約される。

「人々が自分の願望を叶えるために、つまりある知覚から別の知覚に移行するために、取り消すことを願うであろうその時間、その全ての時間はまさしく不幸なときそのものである」(Maupertuis 1749, pp.202-03)。

不幸なときは長く続かないとある人が考えるとき、その人は幸福よりも不幸のほうが大きいのだということ認めようとはしないが、それでも強度を加えるなら不快の合計はさらに増加することになり、「通常の人生では、不快の合計が満足の合計を上回る」ことになるとモーペルテュイは考える。

さらにモーペルテュイは次のように述べる。

「人間のあらゆる気晴らしは彼らの不幸の状態を証明する。人がチェ

スで遊び、狩猟を行うのは、不愉快な知覚を避けるためでしかない。全ての人は自分自身を忘れるために重要やたわいもない仕事に没頭する。そのような楽しみでは充分ではない。彼らは別の手段に頼る。ある人は悩んでいることを忘れるために、蒸留酒を手にすることで魂を高揚させるし、他の人たちは自分の退屈の気晴らしのために葉巻を吹かせるし、またその他の人たちはある種の恍惚に陥る液を使って自分の苦痛を和らげる。ヨーロッパ、アジア、アフリカそしてアメリカにおいても、全ての人々はさまざまな場所で人生の不快の癒しを探すのである。

以下のことを人々に尋ねた場合、つまり、人々の状況下で、今まで行ったその人生をもう一度やり直したいと願うだろうか、と尋ねた場合、同意する人は少ないことがわかるであろう。そのことは彼らが満足よりも不快を多く経験したことのもっとも明白な証言となるのではないだろうか」(Maupertuis 1749, pp.203-04)。

モーペルテュイは、人生の気晴らしが幸福よりも不幸のほうが勝っていることの証拠とする。人がチェスをし、酒を飲み、タバコを吹かすのは、自分の不幸を癒すためである。また、自分の人生をもう一度やり直したいかと聞かれたとき、ほとんどの人はそれを否定するであろう。それは自分の人生が不幸であったことの証拠とされる。

モーペルテュイの見解を整理すると、「人間が何か願望を叶えるまでの時間は不幸である」、「気晴らしは不幸を緩和させるために行う」、「同じ人生をもう一度やり直したいと考える人は少ない」の三点に不幸の優越の論拠を置いているといえる。

このような整理を行った後、第3章の「快樂と苦痛の性質についての思索」に論題は移る。快樂と苦痛には肉体によるものと魂によるものとの区別が行われる。最初は肉体について考察されている。

- 「1. 外部の諸対象が我々に与えうる快樂のうちで、最も大きなものを検討してみれば、それらが駆り立てる感覚はすばやく終わって

しまう傾向にあるということ、また、その感覚が持続するときには、その感覚は弱くなり、気の抜けたものとなり、それがあまりにも長く続く場合には、不快にさえなるということがわかるだろう。これに反し、外部の諸対象が引き起こす苦痛は、人生と同じくらいに持続し、その苦痛が続けば続くほどますます耐え難くなる。……。

2. 私たちが快楽を手に入れることができるのは体の一部でしかないが、我々の全身が苦痛を感じうる。指先や歯は最も大きな快楽を生み出す器官が我々を幸福にしうる程度よりも大きな苦しみを我々に与えうる。
3. 最後に、もう一つの考察すべき事柄がある。肉体の快楽を引き起こす対象をあまりにも長く、もしくはあまりにも頻繁に使用すると、身体障害をもたらすのに対して、苦痛を引き起こす対象を持続的に、もしくはあまりにも頻繁に繰り返して用いると、より一層身体障害をもたらすに過ぎない。この場合にはどんな相殺も存在しない。我々の肉体が私たちを楽しませてくれる快楽の程度は固定され、とても小さいものである。その快楽に浸りすぎると、それによってこらしめられる。苦痛の程度のほうは際限がなく、快楽でさえもが苦痛を満たすことに貢献するのである」(Maupertuis 1749, pp. 209-11)。

モーペルテュイによると 1. 「肉体の快楽が続くと、快楽は弱くなり不快にさえなる。それに反して、肉体の苦痛の持続はさらなる苦痛を生み出す」。2. 「快楽は身体の一部によってしか手に入らないが、苦痛は身体のあるあらゆる箇所によって生み出される」。3. 「肉体の快楽を頻繁に行おうとすると、身体障害すらおこしかねない」という三点で肉体の快楽と苦痛を論じている。結論として、肉体の苦痛は快楽を上回るものと考えられる。

次に魂の快楽と苦痛の本質の考察に移る。まず、魂の快楽の説明から始まる。魂の快楽とは人間が自分の財産や力を増加させることを意味しない。人間に財産や力をもたらすのは、魂ではなく肉体の快楽である。吝嗇家や野心

家の快樂は肉體の快樂である。それと同様に、自分の財産や力をなくした人の苦痛も肉體の苦痛であり、魂の苦痛ではない。その上で、モーペルテュイは次のように述べる。

「魂のあらゆる快樂は知覺を二つの種類に分類するように私には思われる。一つが、我々は正義の實踐 (la pratique de la justice) によって感じる事ができるというものであり、もう一つが、真理の觀察 (la vue de la vérité) によって感じる事ができるというものである。魂の苦痛はこれら二つのものを欠いていることである」(Maupertuis 1749, p.212, 傍点は原文のイタリック)。

モーペルテュイによると、魂の快樂は「正義の實踐」と「真理の觀察」に依拠する。しかしながら、この二つについてモーペルテュイは定義をしない。というのも、「正義の實踐」という言葉を耳にするし、その達成が人の義務であると我々は信じているからであり、「真理の觀察」という言葉を耳にするし、そのような知覺を我々は見、感じる事が出来るからである、と述べられており、そのことで証拠は充分であるとされる。

この魂の快樂は肉體の快樂とは異なる性質を持つものであるとモーペルテュイは考える。

「第一に、享受によって急速に消滅し、弱くさせるどころか、魂の快樂は持続し、その持続と反復がその快樂を増加させる。第二に、魂はその及びうる全領域の中に快樂を感じる。第三に、これらの快樂の享樂が魂を弱める代わりに強くする」(Maupertuis 1749, p.213)。

このように魂の快樂は肉體の快樂とは異なり、決して時間とともに弱くならない。魂が苦痛を感じる時は「正義の實踐」や「真理の觀察」が出来ないときである。しかし、その苦痛は決して過酷なものではない。なぜなら、真理の探求を行う人は、もしそのことが不可能だとわかると、別のものを探

求するからである。それゆえ、魂の苦痛は回避しやすいのである。モーペルテュイは魂の快樂を享受している人たちの例として、ニュートン主義者を挙げている⁷⁾。このように魂の快樂を肯定しつつも、それでも大別してみると、モーペルテュイは「通常の人生では、不快の合計は満足 of 合計を上回る」と結論付ける。

次にモーペルテュイは「われわれの状態を改善するための方法」を論じる。その方法は、満足を増加させるか、不快を減少させるかのどちらかである。

「我々の状態を改善するためには二つの方法しかない。一つが満足の合計を増加させることであり、もう一つが不快の合計を減少させることである。そのようなものが賢人の人生で用いられるべき計算である。

そのようなことが真実であると疑いもなく感じていた古代の哲学者たちは二つの範疇に分かれた。一方は、我々の状態を改善するために、できうるかぎり快樂を増加させるべきであると信じる人たちであり、他方は、苦痛の減少しか求めない人たちであった。

そういったものが、名高いエピクロス派とストア派の本質的な違いのように私には思われる」(Maupertuis 1749, p.218)。

エピクロス派は満足の合計を増加させ、ストア派は不快の合計を小さくなるように望んだとモーペルテュイは考える。モーペルテュイはこの両者を比べると、ストア派のほうが合理的であるとして、エピクロス派を否定する。かくして、モーペルテュイは次にストア派の考察に移る。

モーペルテュイのストア派の考察は、ストア派の人々を列挙して、彼らの思想を紹介することに留まっている。そのような論理展開の中で、モーペルテュイが軸にしているのが自殺と神についてである。

「今生の不快に対してストア派が勧めた予防策と治療法は以下のもの

7) ウォーレスもニュートン主義を高く評価している。また後述するようにモーペルテュイはストア派を好意的に捉えているが、ウォーレスも同様にストア派を肯定的に評価している。

である。つまり、自分の信条と欲望を制することであり、また、外部のあらゆる対象の効果を無にさせることであり、そして、もし人々がふさわしい平穏を見つけることが出来なければ、命を絶つということである」(Maupertuis 1749, p.224)。

「神を信じることと、神慮を信じることは、古代の哲学者においては同じものではなかった。彼らは神については、一神教の必要も、永遠存在の必要も認めず、世界で生じるあらゆる出来事の自由の原因ともその予見とも考えなかった。幾人かの人によれば、神は知性や行動を欠き、世界の統治のために役に立たないものでしかなかった。ストア派が神慮や神の支配について時折語ったとしても、彼らの言説はどちらかといえれば独断的な宣言となっていたであろう」(Maupertuis 1749, pp.229-30)。

モーペルテュイはエピクロス派に比べてストア派の見解を合理的と捉えているゆえに、これらの見解に従えば、モーペルテュイが『道徳哲学の試論』の序文で述べたように、自殺を擁護し、キリスト教を否定しているという批判を受けたのも仕方ないであろう。確かにモーペルテュイは自殺を否定しているが、その主張は主要な論理展開にならず、むしろ断片的に述べられているにすぎない。

最終的に自殺する権利や魂の不死についての問題は宗教に依拠することになる。この点ではストア派はキリスト教と大いに異なっていた。さらにいえばストア派の中でも人によって異なっていたが、キリスト教のように死後での報いや罰、それに加えて神を唯一神とも考えていなかったのも、ストア派は自殺を否定することはしなかった。しかしながら、18世紀におけるキリスト教の権威をモーペルテュイが考えるとき、自殺を否定する文章を挿入せざるを得なかったであろう。

モーペルテュイのストア派の議論はこれで終わり、次にキリスト教の考察に移る。なぜなら、理性で考案できるのはここまでであるので、次に宗教に立ち入らなければならないとモーペルテュイは考えるからである。モーペルテュイは人々の状態を改善する方法としてストア派を考察したが、それは自

殺を認めるかどうかには焦点を当てている。しかしながらモーペルテュイは自殺を否定すると自ら述べているので、モーペルテュイの見解に従うと最終的に明確な改善策はストア派からは見つけられないことになる。

まずモーペルテュイはキリスト教とストア派が異なるというところから論じ始める。運命論を信じるストア派に対して、キリスト教は運命を空想のように見なすということである。そのことに加えてモーペルテュイが特に注目するのは、死の概念である。ストア派では死は無に帰するということであるが、キリスト教では死とは永遠に幸福である新しい人生を始めるためにこの世界を去るという両者の違いである。

他の差異は、キリスト教の本質ともいえる、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という教えに関わるものである。ストア派は他人とのかかわりはそれほど重要ではなく、最終的に問題は自分の心の平静に帰せられる。しかし、キリスト教はストア派とは異なり博愛を主張する。このようなキリスト教の立場をモーペルテュイは肯定することから始める。

「私たちはここまでキリスト教を一つの哲学体系としてしか考察してこなかった。キリスト教が幸福について真実の規則を含んでいることは確かであるし、福音書の道徳しか確立されなかったとしても、それに従うことを断るのは合理的な人ではないだろう」(Maupertuis 1749, pp.241-42)。

このようにモーペルテュイはキリスト教の精神に則っているかのように見える。しかし続けて以下のように述べている。

「キリスト教が教える実践的規則に関しては、キリスト教を崇高に見なす必要はない。幸福になろうと望むことと正当な思索を行いたいと望むことで充分である。

しかしながら、キリスト教は単なる哲学体系ではなく、一つの宗教である。私たちの精神が優れたものをとても容易に見出せる行為の規則

をわれわれに規定するこの宗教は、理解することが出来ない思索の教義をわれわれに提唱する」(Maupertuis 1749, p.242)。

このようなモーペルテュイの見解はキリスト教を一つの哲学と見なし、その哲学自体は認めるものの、信仰とは別のものであると考えているようにも取れる。そしてモーペルテュイは最後の章である「宗教についての考察」を展開し始める。

キリスト教は唯一の宗教体系ではないし、キリスト教それ自体においてもさまざまな宗派が存在する。そのことがモーペルテュイは宗教を理解することを困難にしていると考え。宗教は啓示を例証するために奇跡を用いるが、しかし、啓示は認めることしか出来ないもので、論証可能なものではない。モーペルテュイは論証が可能かどうかという点に重きを置く。

「もし宗教が厳密に論証可能だとすると、全ての人はキリスト教徒になるだろうし、キリスト教徒にならずにはいられないだろう。幾何学者の世界での証拠や証言の中に見られるがゆえに受け入れられるというように、人々はキリスト教の真理に従うだろう。論証過程を追っていくことができない人でも、ユークリッドの命題の真理を疑う人はいないだろう」(Maupertuis 1749, pp.244-45, 傍点は原文のイタリック)。

以上のものがモーペルテュイの『道徳哲学の試論』で考察されたことである。モーペルテュイは人生では幸福よりも不幸のほうが多いと結論付ける。その根拠は、「人間が何か願望を叶えるまでの時間は不幸である」、「気晴らしは不幸を緩和させるために行う」、「同じ人生をもう一度やり直したいと考える人は少ない」という三点に加えて、肉体の快樂については以下の三点である。それは、「肉体の快樂が続くと、快樂は弱くなり不快にさえなる。それに反して、苦痛の持続はさらなる苦痛を生み出す」、「快樂は身体の一部によってしか手に入らないが、苦痛は身体のある箇所によって生み出される」、「肉体の快樂を頻繁に行おうとすると、身体障害すらおこしかねない」、

である。モーペルテュイはストア派の見解を参照するが、ストア派が自殺を否定しないのに対して、モーペルテュイは否定するために、ストア派からは決定的な解決策を導き出していない。次にキリスト教を考察し、その博愛の精神を高く評価するものの、宗教そのものについては、論証不可能であるとして、全面的に擁護していない。かくして、人間は幸福になる術はないとして、この世での不幸の優越をモーペルテュイは主張するのである。

3. ウォーレスの幸・不幸の比較について

ウォーレスの『展望』は前半部の4章までがユートピア論であり、後半部が神学となっている。ウォーレスは両者の関係を決して切り離して考察したのではなく、関連付けて考えている。ユートピアが崩壊する原因は過剰人口による大地の不足であるが、この大地は神によって創られたゆえに、過剰人口を導くユートピアが批判される。ユートピアの議論が終わってから、『展望』は神学の議論に入っていく。ユートピア論の次の章で、「自然の美、知恵、壮大さについての一見解」が考察された後、幸・不幸の比較の議論に入っていく。

ウォーレスは「人類と獣類との苦悩についての一見解」を考察する。まず獣類であるが、動物の肉体の構造の精巧さを誉めながらも、動物の生命の短さ、弱肉強食の残酷さを述べ、その苦悩を認めている。人間についてもその理性や想像力を褒め称えながらも、人間の過失や悪徳が人類を多くの困難に巻き込んできたとし、そのような人間の不幸を強調した人物としてモーペルテュイの名前をウォーレスは挙げることになる。そうして、ウォーレスは人間の幸・不幸に焦点を絞り、不幸のほうが勝っているとするモーペルテュイを批判することになる。

ウォーレスはモーペルテュイを批判する前に、懐疑主義者の人間の無知や理神論者の機械仕掛けの神の議論を例に出し、彼らの議論に比べれば、モーペルテュイの議論はまだ正当なものであると述べている。

「私たちはモーペルテュイ氏のような大胆な哲学者がきつぱりと、人

生には幸福よりも不幸のほうが多いのだと述べることに驚く必要もない。世界中の数多くの重大な惨事がこの仮説のために、そのようなもつともらしい議論の土台となっているので、頭の切れる哲学者たちだけでなく、大衆、そして、神慮や神の熱心な賛同者の幾人かですえ、自然の様相に時として困惑させられるであろう。それゆえ、この題目において、モーペルテュイ氏は申し訳の立つほうであろう。しかしながら、それがあらゆる教義の中で、そして賢明で善良な神慮にとって、最も適したものに反対であるのは、この紳士にとって不幸であり、彼の見解に強い反感を生み出すに違いない。というのも、もしある体系が善よりも悪を生み出し、幸福よりも不幸を生み出すなら、その体系は善ではなく悪と考えなければならないのだろうか。それゆえ、人類の慰めにとつても必要である教義のために、モーペルテュイ氏の見解と彼のような気質のほかの哲学者たちの見方が誤っていることを示すことが大いに望まれる」(Wallace 1761, pp.188-89)。

ウォーレスはまずモーペルテュイの「人間が何か願望を叶えるまでの時間は不幸である」という見解を批判する。

「私たちは時として自分の知覚を変えることを望むし、私たちが現実には享受するものとは違うものを所有することを望むので、モーペルテュイ氏のように、自分の願望を満たすまで私たちは不幸であると推論すべきではない。この変化の願望はわれわれが苦痛であるというわれわれの知覚から必ずしも生じるものではない。この原因からそのことが生じることはめつたにない。これは私たちの精神にほぼ継続して行われている善の観念から生じるものである。これらの観念の数は無限である。それらの観念が、善の偉大さのわれわれの理解とそれを望むわれわれの感覚とに、願望をつりあわせるのである。しかしこのことは私たちが不幸にしない。モーペルテュイ氏が主張するように、私たちが自分の望むものを手にするまで、私たちの時間を消し去ることを望むことはしないし、

もしそうだとすると、私たちは小さい善よりも大きな善を望むのだと解釈出来るだけだろう。この精神状態の間、私たちは何千という快樂を享受する。もし変化の願望が現在の苦痛の知覚から生じているのなら、またもし私たちがあまりにも熱心に存在しない善を望むのであれば、私たちは不幸である。

もし痛風や結石によって苦しんでいる人がこの残酷な苦痛から逃れることを望むならば、この苦痛が取り除かれるまで幾分彼は不幸である。しかしながら、彼はしばらくの間は多くの心地よい反省を享受できるかもしれないし、多くの心地よい感覚を感じるかもしれない。苦痛が取り除かれるまでのあらゆる時間が不幸であるということにはならないだろう。敬虔と美德、彼の以前の行動の高潔さと威厳、過去の享樂の記憶と将来の希望、彼の家族や友や故郷の繁榮という展望、神慮の知恵や自然の美や技芸の素晴らしさの瞑想がどれほど慰めの源になることだろうか。時として苦痛を大いに緩和し、時として苦痛を完全に消し去ってしまうような多くの慰めを認められなくなるほどの過酷な苦痛はそれほど存在しない。私たちは最もひどい病気に苦しみ、私たちの状態が最も嘆かわしく見えるときでさえ、もし私たちがあらゆる瞬間に苦痛に味方するのなら、私たちの計算は過ちに陥るだろう。私たちの状態が比較的安逸で、人生の普通の状態で生じること以外に私たちが何も感じないときは、なおさらである。

広大な自然の中にある魅力的な物の数は無数と言われうる。私たち自身のために、私たちが特に関心を抱いている人たちのために、そして至福を感じることの出来るあらゆる生き物のために、それらを獲得しようとする私たちの願望もまた無限である。私たちはそれらをさまざまな想いで望む。時として私たちは最も高貴な享樂のために熱情や熱望を感じるが、そのような熱意や行過ぎた願望は私たちに不幸にはしない。ましてや私たちの広くて包括的な見解、すなわち私たちの願望の源であるが、それは私たちの幸福にとって取るに足らない追加ではない」(Wallace 1761, pp.191-93)。

モーペルテュイの議論は、人間が何かを手に入れるまでの時間は、人間が消し去りたいと思う時間であり、その時間は苦痛な時間であった。ウォーレスも病気を例に挙げながら、それを部分的には認める。病気が治癒するまでの間、人間は不幸である。しかし、必ずしも楽しみがないわけではない。たとえ苦しんでいる間でも、数多くの慰めごとがあり、それで気分を紛らわすことが出来る。もちろん、それで病気の治癒という本質的な解決が達成できるわけではないが、その不幸を緩和することが出来、時にはその病気を忘れさすほどの快楽を享受できるときさえあると考えられる。このようにして、ウォーレスは「人間が何か願望を叶えるまでの時間は不幸である」という見解に反論を行う。

次の反論は「気晴らしは不幸を緩和させるために行う」ものだというモーペルテュイの意見についてである。

「友達とチェスをするを選び、カードゲームで気を紛らわせるためにいすに座る全ての人を私たちは不幸な人と呼ばないだろう。私たちは食事の前が不幸でないのと同様に、遊び始める前も不幸ではないし、私たちは、心地よい娯楽として遊ぶことを選び、ある状況下で私たちが獲得できるほかの快楽ではなしにそのことを選好する。私たちが食べ、飲むのは、私たちが不幸だからではなく、私たちが空腹か、のどが渴いているかのどちらかだからである。私たちがパイプを吹かし、何百という他の行動を行うのは、私たちが不幸だからではなく、私たちの享樂を増加させるためである。私たちがあらかじめ感じる欲望は私たちが惨めであるということを実証しているのではなく、自然の賜物によって我々が快楽をより深く味わうようにさせているのである」(Wallace 1761, pp.194-95)。

モーペルテュイは、人間とは概して不幸であるゆえに、その不幸を緩和するために娯楽をすると考える。ウォーレスも娯楽が人間の幸福を増加させることは当然に認めるが、娯楽は不幸を緩和するのではなく、幸福を増加させ

るということが重要となる。

次にモーペルテュイが提起した三つの条件の最終問題であるところの「同じ人生をもう一度やり直したいと考える人は少ない」という見解に対してウォーレスは次のように反論を行う。

「もし全ての人類が、美德が十分に報われ、悪徳がそれに値する罪を受けるという、死後の将来の状態を期待するなら、死後のほうが幸福であると期待されるような人々は、自分の人生を繰り返すことを選ばないだろう。しかしながら、このことが善よりも悪を彼らが感じてきたことの証拠ではない。それが示すただ一つのは、彼らは死後での大きな快楽を期待したということである。自分自身の犯した罪のために罰を恐れる他の人々は、より不幸になることよりも同じ人生の場면을繰り返すことを望むであろう。しかしこれもまた、彼らが苦痛よりも快楽を感じてきたことの証明ではない」(Wallace 1761, p. 196)。

モーペルテュイが「同じ人生をもう一度やり直したいか」と尋ねた問いに、ウォーレスは牧師ゆえに、ここで死後の問題を持ち出す。ウォーレスにとってこの問題は今生を振り返って答えを出す問題ではなく、死後を考察しながら答えを出す問題とされる。キリスト教の死後の概念を用いると、このモーペルテュイの問いは全く違った意味に変わる。なぜなら、この世で悪しき行為をした人が、死後で罰を受けるよりも、たとえ不幸だとしても今生の同じ生活をもう一度送ることを望み、逆に死後で報いを期待する人は、同じ人生を繰り返すことを望まなくなるからである。このようにキリスト教の報いと罰を考察に含めると、モーペルテュイの意図とは全く逆になる。このようなウォーレスの議論は普遍的なものではない。中にはストア派のように死後を信じない人もいるからである。ウォーレスはそれを理解しつつ、この問題をウォーレスのように死後と関連付ける見解を持ち出す人もいるがゆえに、モーペルテュイの議論もまた必ずしも正しいとは言えないと結論することとなる。

このような反論をウォーレスはモーペルテュイの三つの議論に対して行った。ウォーレスがここで重きを置いているのは、モーペルテュイの議論が過ちで、ウォーレスの議論が正しいということではなく、モーペルテュイの議論に対して、ウォーレスのように考える人もいるであろうから、モーペルテュイの議論は決して絶対的に正しいとはいえないということである。ウォーレスはタイトルでは「不幸よりも幸福のほうが勝っていることを示す」となっているが、その実は、モーペルテュイの「幸福よりも不幸のほうが勝っている」という議論は必ずしも普遍的なものではないという例証こそが中心である。なぜなら、ウォーレスは、自分自身の議論もモーペルテュイの議論も、確たる証拠を欠いていることを認めているからである。最終的に不幸と幸福の比較は、各人に任せられる。普遍的なものではなく、その人自身が決定するものである。

次に、肉体の快樂の考察に移る。モーペルテュイはこれもまた三つにまとめていたが、ウォーレスはこれを四つに置き換える。

「モーペルテュイ氏に加担すると、肉体の快樂は肉体の苦痛に比べると狭い領域に制限されると述べられるに違いない。かくして、(1) 肉体の快樂は減少するが、快樂の持続によって苦痛は増大する。(2) 快樂を引き起こす対象の過度な使用は快樂を終わらし、多くの苦痛と病気を誘発する。しかし、苦痛の対象の絶え間ない適用は、その対象を心地よいものとする代わりに、いっそうの苦痛を生み出す。また、(3) 激しい快樂は肉体のある一部分によってしか生み出されない一方で、あらゆる箇所は激しい苦痛を生み出しうる。そして、(4) 肉体の快樂は一度に短期間しか持続できないが、肉体の苦痛が終焉するのは死ぬときでしかない」(Wallace 1761, pp.201-02)。

ウォーレスはこの四つを個別に反論するのではなく、一つに総括して批判する。

「たとえ、モーペルテュイ氏のこれら四つの考察が独創的であるとしても正当なものだとしても、そして快樂より苦痛のほうが大きいかもしれないとしても、実際のところ（私たちがこの事例において正当に議論できるのはこの実際としての事実からだけなのだが）私たちは肉体から苦痛をこうむるよりも多くの快樂を享受しているのである。たとえ私たちが重病であったとしても、老いの病気で苦しんでいるときでさえも、このことは真実であろう。さらにこのことは人生のほかの時期や状態にも適応できるであろう。

パンを乞い、頻繁に飢えと寒さにさらされている物乞い、額に汗を流すことによって自分の糧を手に行っている人類の労働者層は、苦痛の感覺よりも多くの心地よい感覺を感じる。病気で苦しんでいる人々に比べると、健康を享受している人々の数は圧倒的に多い。残酷な苦痛と激しい病気はめったに私たちに襲わない。病気は通常ほんの短い期間しか続かないし、この短い期間とて全く慰みがなく過ぎてゆくわけではない。豊富に、もしくは悪くない程度に物を与えられている人と比べると、極貧にあえいでいる人は少ない。自由を享受している人に比べると獄中で惨めな生活を送っている人は少ない。概して、感覺のみが調べられるかぎりにおいて、快樂の側に大いに比重があるのである。

私たちの精神的な快樂と苦痛を比較して、同じ程度の優越が前者の側に見つかればいいのだが。このことが真実であることが望まれるが、おそらく証明は等しく明確でないであろう」（Wallace 1761, pp.202-04）。

ウォーレスはモーペルテュイの議論を四つに要約しておきながらも、それに対して正面から議論しているわけではない。モーペルテュイが肉体の快樂は減少するし、時には苦痛すら生み出すという論旨に対して、ウォーレスは病気や貧困に苦しんでいる人は全体的な数からすると少なく、概して快樂のほうが大きいと考える。

ウォーレスは最終的にこのような幸・不幸の問題を善と悪徳の問題に帰する。この世界には悪が多いため、一見すると不幸のほうが勝っていると感じ

られるのである。かくしてウォーレスは、この問題を六つにまとめ、以下のよう論じていく。

最初にウォーレスが議論するのは不安、警戒心、疑い、そして恐怖といったものである。こういうものが人間を不幸に陥れる。しかし、人間には希望があり、それが不安を抑制することに繋がると考えられる。

「彼らの未来の希望は、彼らの不安が苦痛を増大させる以上に、現在の喜びをはるかに増大させる。概して彼らの懸念は彼らの平穏や至福を乱すというよりも、彼らを用意深くし、彼らを失望させるような楽天的な希望に歯止めをかける。概して人生は恐れと不安の生活ではなく、希望と自信に満ちたものである。私たちはあまりにも頻繁に真の困苦を生み出す想像上の恐怖に襲われるけれども、私たちは心地よくて陽気な見込みにそれ以上に喜ぶのである。確かにそれはしばらくの間は見せかけにしか過ぎず、あまりにも頻繁に失望を伴うけれども、最後には失望の苦痛によるよりも、もしくは将来の悪というわれわれの臆病な懸念によるよりも、はるかに大きな快樂を私たちは手にするのである」(Wallace 1761, pp.205-06)。

次にあげられる悪徳は野心に伴う問題である。野心はモーベルテュイの「人間が何か願望を叶えるまでの時間は不幸である」という見解と関連する。野心が強ければ強いほど、願望は強く、そしてそれが成就するのが困難となる。このような状況において人は不幸を感じる。しかしながら、普通の人にとって、願望はそれほど大きなものではないので、それほど不幸を感じることはないウォーレスは述べる。

「世界帝国をつくるか、全人類の頂点に立つことによってしか満足しないアレクサンドロスのような人は、身分に関わらずほとんどいない。人類の大多数は、自分の状況に満足しているか、もし彼らが手に入らないものを望んだとしても、彼らの願望は冷静で、温和で、理性的なもの

であるので、彼らの野心の失望を通して見られる不幸よりも、彼らが所有している享樂によってはるかに幸せであると、正当に言われるだろう」(Wallace 1761, pp.207-08)。

三番目が悲しみの大きさの問題である。

「自分が所有している慰めを失うことから、もしくは彼らを感じる現実の悪徳から生じる悲しみは、概して人類を幸福よりも不幸にさせるほどではない。実際に何人かは終生嘆き暮らしている。憂鬱と苦悩が彼らの精神をむさぼり、彼らの生命力を糧とする。しかしこのようにして憔悴している人はごく僅かでしかない。われわれが最もひどい苦悩に苦しんでいる間、多くの慰めが私たちの悲しみを解放する。ほとんどの悲しみは、それが最も酷いときでさえ、とても温和なものであるし、たとえ酷くなったときでさえ、直ぐに和らぎ、僅かの間しか続かない。それゆえ実際のところ、悲しみは私たちがその恐るべき様相からすぐに結論しがちであるものよりも、私たちの休息にとってそれほど危険ではない」(Wallace 1761, pp.208-09)。

人は望んでいるものを手に入れるまでの間に苦痛を感じるが、手に入れたものを失うことにも苦痛を感じる。しかしながら、その苦痛もそれほど過酷なものでもないし、期間もごく僅かなものでないとウォーレスは考える。

四番目がねたみや激怒といった激しい情念である。これらの激しい情念が人を苦悩に追い込むが、しかしながら、これらの情念も結局のところ長続きはしないと考えられる。

「これらの悪意に満ちて荒れ狂った情念は、あまりにも頻繁にわれわれの感情の穏やかな流れをさえぎり、私たちの幸福を乱す。これらの情念は悪意と同程度の苦悩を与えるが、概して、人類のより平静でより親切的な感情から生じるより多くの規則的な喜びによって大いに相殺されな

いほどには、情念はそれほど頻繁でもないし、それほど長期間続くこともないし、それほど強いものとなることは無いし、それほど厳しいものともならない。正当な計算に従うと、そのような悪意に満ち、荒々しい情念の支配下にある人生の一部は、平静で喜ばしい慈善に費やされる一部に比べると、短いものでしかない」(Wallace 1761, pp.209-10)。

五番目が人間の弱さに由来する悪徳に対する仁慈である。世界には確かに悪徳や激しい情念が存在するが、それに対して人は正義と仁慈に高い敬意を払い、慈善的な行動を取ってきた。そういったものが、この世界の苦痛を減少させることに繋がると考えられる。

「あらゆるこれらの悪徳と弱さが事実無数に存在するにもかかわらず、そして充分には嘆かれていないのではあるが、他方で不完全な存在だとしても人間は自然の正義と仁慈について高い敬意を見出し、自分の力を不当にそして悪く使うよりも、友好的な社交に、無垢で、正当で、そして慈善的な行動といったことに従事することが認められるに違いない」(Wallace 1761, p.211)。

ウォーレスは最後に魂の快樂について述べる。モーペルテュイは肉体の快樂は苦痛のほうが大きいとして否定するが、魂の快樂は肯定的に考えた。ウォーレスはここで自身の魂の快樂についてまとめる。

「美德と知識から生じる快樂は (1) 急速になくならない。(2) 享樂によって弱められない。(3) 精神を弱くしない。それどころか、(1) 長続きする。(2) 続けられ、繰り返されることによって増加する。(3) 精神を強くする」(Wallace 1761, p.213)。

ウォーレスはモーペルテュイの議論に反論を行った後、悪徳と美德に関連するものをあげ、この世には不幸よりも幸福のほうが大きいと論じた。しか

しながら、この議論はあくまでも道徳的証拠でしかなく、決定的な証拠を欠いていることをウォーレスは認めている。

「しかしながらこの事をあらゆる人々に確信させることは不可能だろう。それは数学的、理論的証拠ではなく、道徳的証拠によるものでしかないからである。人間は自分の感覚や経験に注目しなければならず、彼らのさまざまな気質やさまざまな生活の状況に従った感情とは大いに異なるだろう」(Wallace 1761, pp.214-15)。

ウォーレスが行ったモーペルテュイ批判は、モーペルテュイの幸・不幸の比較についてであり、モーペルテュイの宗教観には全くといって良いほど触れられていない。モーペルテュイが世界には不幸のほうが勝っていると考えてのに対して、ウォーレスは幸福のほうが勝っていると論じてはいるが、その文章では、確たる証拠はないと何度も述べている。確かにウォーレスは、人間の自由の乱用が悪徳を生み出したということを重要視しており、幸・不幸の問題は断定出来ないと述べるにしても、やはり神の擁護から人間は概して幸福であるという見解を重んじ、モーペルテュイの考える不幸の優越論を受け入れることはできなかったのである。

ウォーレスは幸・不幸の議論を行う前に、次のように述べている。

「人生においては幸福よりも不幸のほうが多いという困難な仮定においてさえ、神慮の知恵と善を擁護し、宗教の主張を守ることが可能であるというのは、真実である。というのも、もし私たちが、人間には自由が与えられているということ、人間がこの自由を乱用してきたということ、この乱用によって過失と悪徳が世界に生まれてきたということ、そして人生の悲劇が生み出されてきたのだということを、証明できるのなら、これらの仮説に従うと、世界の賢明で善良な統治にも関わらず、私たちは悪の優越のための説明を出来るかも知れない。しかしもし私たち

が善の優越を確立することができるなら、それは神慮の主張を擁護することに大きな利点となるに違いない。そして神の慈悲は偉大であり、彼の寛大な慈悲はあらゆる彼の作品にいぎわたっているので、考察によって私たちは自分たちの視界に悪よりも善を見つけうることが合理的に望まれるだろう」(Wallace 1761, pp.189-90)。

4. 終わりに

モーペルテュイは幸・不幸を比較した後、不幸のほうが勝っていると考えた。モーペルテュイが依拠するのはストア派である。だが、モーペルテュイがストア派から考察するのは自殺についてであり、その点で、モーペルテュイに対して自殺を擁護しているという批判が生じたのは当然とも言える。モーペルテュイは自殺を否定すると序文で述べているため、そうであるとする、不幸から逃れられる根本的な解決策はなくなる。むしろ解決策がないゆえに、不幸のほうが勝っているということにもなる。

ウォーレスはユートピアを批判することで、現世の悪を容認する。しかしこの世界が悪に満ちた世界であると考えたわけではない。たとえ悪が存在するとしてもこの世界は陰鬱なものではなく、自然、動物、人間世界は調和の取れたものだウォーレスは考える。それゆえにウォーレスは人間とは概して幸福であると考えてるのである。そして悪が存在する理由を人間の自由の乱用に求めたのであった。ウォーレスはこの世界の悪徳が人間によるもので神によるものではないということを重要視しているために、一見すると、幸・不幸の問題は軽視されがちであるが、しかし、神を擁護する上でも、人間は概して幸福であるという議論は重要なものである。

『展望』の第11章は死後の世界が論じられる。人間は現世の行動にしたがって、賞罰を受けることになる。このように見てみると『展望』は悪徳を中心として一つの議論が成立することがわかる。悪徳を擁護したユートピア、しかしそれでいて悪徳の存在にもかかわらずこの世界は悲惨なものではないと論じた、幸・不幸の議論、そして悪徳の根源を人間の自由求め、最後に悪

しきを行為をした人間の罰へという議論である。いわば、『展望』はウォーレスの神議論としての一面を持つともいえるであろう。

参考文献

- Baumgardt, David (1952), *Bentham and the Ethics of Today with Bentham Manuscripts Hitherto Unpublished*, Princeton & New Jersey, Princeton University Press.
- Beeson, David and Coleman, William Oliver (1999), 'When Political Economy "Crossed the Sea": An Unpublished Paper by Maupertuis on Bimetallism', in *History of Political Economy*, 31,2: 317-335.
- Grimsley, Ronald (1971), *Maupertuis, Turgot et Maine de Biran Sur l'origine du langage Etude de Ronald Grimsly suivie de trois textes*, Librairie Droz, 1971.
- 益邑齋・富田和男訳 (2002) 『モーベルテュイ、テュルゴ、メヌ・ド・ピラン 言語表現の起源をめぐって』、北樹出版。
- Maupertuis (1749), *Essai de Philosophie Morale*, Berlin. In *Oeuvres*, Lyon, 1768, rep. Hildesheim & New York, Georg Olms Verlag, 1974.
- Wallace, Robert (1761), *Various Prospects of Mankind, Nature and Providence*, London. rep., New York, Augustus M. Kelley, 1969.
- Valentin, Michel (1998), *Maupertuis un Savant Oublié*, La Decouverance.
- 田中敏弘 (1971), 『社会学者としてのヒューム』、未来社。
- 永井義雄 (1962), 『イギリス急進主義の研究』、御茶の水書房。
- (2000), 『自由と調和を求めて』、ミネルヴァ書房。
- (2003), 「第2版『人口論』のウェブスター、ウォーレス、フランクリン」、永井義雄、柳田芳伸、中澤信彦編『マルサル理論の歴史的形成』所収、昭和堂。
- (2003), 『ベンサム』、研究社。
- 中野力 (2003), 「ロバート・ウォーレスとケイムズ卿——自由・必然論を巡って——」『関西学院経済学研究第34号』、329-351頁。
- (2008), 「ロバート・ウォーレスの『人口論』『付録』と『展望』の研究——マケンジ書簡と「死と悪徳」草稿を中心に——」『マルサス学会年報第17号』、31-54頁。